

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370520

研究課題名(和文) 漱石を通してみる近代日本人の書字行為と文字観、表記観の日本語学的研究

研究課題名(英文) The study to clarify modern Japanese notation awareness by analyzing the notation of the work of Soseki Natsume

研究代表者

佐藤 栄作 (sato, eisaku)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：80211275

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：夏目漱石の自筆原稿の推敲、自筆原稿と活字本文の比較、活字本文間の比較などを通して、近代日本人の文字使用、語表記についての意識を考えた。理論上は、どの文字種を用いるかが最も上位で、どの字体を用いるかは下位のはずだが、必ずしもそう意識されていない。漱石は語形第一で、用字にこだわらない場合もあるが、読者は漱石の用字を過大視する。一方、現代人は、漢字を仮名に和らげることに甘いが、異体字を大きな違いだと感じる。ここには、結果として「漢字一字一字体」を推進してきた戦後の国語政策が影響していると考えられる。

研究成果の概要(英文)：I researched the notation of handwriting manuscripts and books of some works of Soseki Natsume. Notation varies according to a book with the same work. Soseki was not particular about notation of his work all the time. In Japan, a reader may mind the notation of the novel than the novelist who wrote the novel. But the modern Japanese permits that a publishing company changes the difficult kanji to the hiragana letter. Postwar national language policy in Japan influences this. Anyway, the Japanese notation which it is complicated, and is full of variety is a Japanese characteristic not to be seen in other languages.

研究分野：日本語学

キーワード：文字 表記 夏目漱石 自筆原稿

1. 研究開始当初の背景

- (1) 本研究に係る科研として、「近代手書き資料としての漱石自筆原稿の文字論的分析とその発展的研究」(課題番号17652046 萌芽研究、2005~2006年度、研究代表者佐藤栄作)がある。そこでは、『坊っちゃん』の自筆原稿、『道草』の書き潰し原稿等を対象として漱石の文字・表記の特徴を分析した。この成果から、①他の漱石自筆原稿、書き潰し原稿についても、同様な傾向・特徴を持つか、②同時代の漱石以外の人物について自筆資料があればそれと比較し、漱石との共通点・相違点を見る、③江戸後期の文字・表記の自筆資料を分析し、明治とのつながり・断絶を確認する、④漱石以降の近現代の日本人の文字・表記に対するとらえ方を漱石と比較する、といった課題が生まれた。
- (2) 特に、漢字の書体・字体に対する意識が、古代と江戸・明治と戦後とで異なっていると予想される。つまり、文字における書体、字体の変遷について、漱石自筆原稿を起点として見ていきたいと考えるようになった。
- (3) 本研究代表者の所属する愛媛大学の所在地松山市は、『坊っちゃん』の舞台として知られている。漱石の没後100年、生誕150年という節目の年に、漱石ゆかりの地である松山から、日本語学の視点からみた漱石の「書くこと」について発信していくことが、地域と研究の両者を活性化させるのではないかと期待があった。

2. 研究の目的

- (1) 日本近代の文章を完成したともいわれる夏目漱石の名作『心』が発表されて2014年で100年になる。2016年は漱石没後100年、2017年は生誕150年に当たる。数々の記念イベントが開催されると予想されるが、日本語学の視点から、漱石にとっての「書くこと」について、漱石100年、150年を総括してみたい。
- (2) 大量に残された漱石の自筆原稿、書き潰し原稿を分析対象として、漱石にとって「書くこと(字を書くこと、語を書くこと)」とはいかなる行為だったのかに迫る。このことは、ひとり漱石という文豪の研究にとどまるものではなく、漱石の「書くこと」、言い換えるなら、活字化を前提として手書きすることの分析を通して、この100年の日本語の文字・表記の変遷、近代日本人の文字観・表記観の変化を明らかにする。
- (3) この研究の目的の一つに、近代文学研究と日本語研究とを結び、新たな成果を生み出したいということがある。近代文学研究者を招聘して講演会・シンポを実施する。それを漱石ゆかりの地である松山で実施することで、漱石来松120年、没後100年、生誕150年の節目の年の記念

イベントとして市民に還元したい。

3. 研究の方法

- (1) 手書き資料の収集
- ① 漱石自筆資料
 - ・『明暗』の書き潰し原稿の写真の入手(江戸東京博物館)
 - ② 近世末から明治における手書き資料
 - ・愛媛大学所蔵『米山日記』
 - ③ 漱石と同時代作家等の資料
 - ・滝田栲蔭蔵近代作家原稿集DVD
 - ・正岡子規「なじみ集」
- (2) 手書き資料の分析、活字との比較分析
同一語の複数表記を中心に以下を分析する。
- ・書き潰し原稿と最終原稿との異同
 - ・自筆原稿と活字本文との異同
 - ・活字本文間の異同
 - ・漱石自身の文字・表記に関するコメント
 - ・現代人へのアンケート
- (4) 新たな課題とその分析
- ① 書体と字体……書体概念の変化、異体字の把握の変化
 - ② 漢字と仮名……簡略化した漢字と仮名との境界
 - ③ 漢字の習得……文字・表記の正誤の感覚と習得、字体把握と習得
- (5) 関係領域(近代文学研究)との接触
- ・作品を書くこと、文章を書くこと、語を書くこと、字を書くこと、それらを含めた漱石の「書くこと」に関するシンポの実施
 - 特に近代文学研究と日本語研究との接点・接触を意識したシンポを「松山坊っちゃん会」との共催のかたちで毎年開催する。

4. 研究成果

- (1) 近代日本人の文字観・表記観について
- ・漱石の書き潰し原稿と最終原稿との差異や、自筆原稿の活字化を分析する中で、漱石が重大だととらえていた事象と、読者とりわけ現代の読者が重大だととらえることとの間にズレがあることが浮かび上がった。漱石が最も重視するのは、用いる語の語形(音形)であるが、漱石の手から離れると、表記が極めて重要視される傾向が強まる。「漱石がこう書いている」は読者には唯一無二のように思われるが、実は、漱石自身はそれほどこだわっていなかったり、活字化の際に生じたものだったりすることがある。また、『坊っちゃん』の冒頭の表記の揺れについての現代人の意識を調べると、理論上の階層(文字体系、字種、字体、字形)について、必ずしも上位を重大だととらえていない。例えば、漢字を仮名に直すことについては、言葉の和らげとして許容するが、類似の別字での書き換えの許容が低いことがある。
 - そもそも、複数の文字体系を交え用いる表記そのものが、他言語に類を見ない日本語の特色であるが、さらに、近代日本人には、同訓異字を含め、漢字が別字になることへ

の抵抗が大きい。戦後の国語政策による漢字一字一字体と音訓制限が、漢字字体が異なれば意味・語が変わるという意識を生み出したのであろう。漢字・仮名をめぐる日本語の独自性そのものも、時代によって変化している。

(2) 近代文学研究と日本語研究との接点を意識した漱石の「書くこと」についての講演会シンポジウムの開催

- ・漱石の「書くこと」について、日本語研究の視点から迫ったが、漱石の「書くこと」は近代文学研究にとっても大きなテーマである。漱石研究の第一人者である近代文学研究者を招聘し、漱石の「書くこと」に関わる講演いただき、本研究代表者との質疑応答というかたちで、日本語研究との接点を作った。
 - ・2015年度、宗像和重早稲田大学教授「活字メディアと漱石の書くこと」(漱石来松120年記念講演・本研究代表者との対談)
 - ・2016年度、石崎等立教大学名誉教授「漱石の表現と語彙—『吾輩は猫である』を中心として—」(漱石没後100年記念講演として)
 - ・2017年度、中島国彦早稲田大学名誉教授「講演を文字にするということ—私の個人主義の例から」、長島裕子早稲田大学大学院講師「『倫敦消息』における「書く」意識をめぐる」(漱石生誕150年記念講演として)
- いずれも「漱石の書くこと」に関わる興味深い内容で、明治期の活字のシステム、江戸っ子的表現と表記、講演の文字化、書簡の作品化についての第一級の研究者による講演で、本研究にとっても極めて有益であった。

(3) 漱石ゆかりの地からの発信

- ・2014年度の野村剛史東京大学教授の講演「漱石・子規の手紙から」に、(2)で挙げた講演を合わせ、これらを松山坊っちゃん会との共催のかたちで市民への公開講演とした。また、それぞれの講演の内容については、講師自身に文字化していただき、松山坊っちゃん会発行の会報に掲載した。
- ・また、漱石の書誌についての研究者である小田切靖明氏所蔵本に愛媛大学図書館蔵本を加え、60種類以上の『坊っちゃん』を愛媛大学ミュージアムで展示した(2017年1月～4月)。『坊っちゃん』発表から110年の間に様々に文字・表記の変化・変容した様子、冒頭一文に限っても40種を超えるバリエーションのあることを、解説を加えて展示し広く市民・学生に示せたことは、研究のプロセス・成果の還元としてインパクトあるものとなった。展示期間中に、公開講演会『坊っちゃん』はどう書かれ、どう読まれたか』を開催し、本研究代表者が『坊っちゃん』冒頭部のバラエティー』を話し、国語教育学の三浦和尚愛媛大学教授に「教材としての『坊っちゃん』」を講演いただいた。展示終了後、展示できなかったものも含め、77種の『坊っちゃん』の表紙と冒頭

部分の写真に、文字・表記についての簡単な解説を付した冊子(1～88p)を作成し、関係者に配付した。

(4) 日本語の文字についての研究

- ・漱石原稿の漢字には、楷書から草書までさまざまな書体(崩しの度合い)のものがあるが、古代の「様式としての書体」とは異なっている。注目されるのは、極端に簡略化された「事」「候」などである。明治時代には、ひらがなに間違うほどの簡略化された漢字がいくつかあり、それは江戸の候文の流れである。それは、戦後はほぼ消えた。これら極端に簡略化された漢字の字体をどうとらえ、どう記述するかという課題が生まれた。これはさらに、そもそも何をもってひらがなというのか(漢字の草体・極草体とひらがなの境界、ひらがなの漢字からの自立)という課題となり、研究期間中、最も大きな関心事となった。近代から離れるが、それらについて論文を発表した。
- ・また、漱石の文字・表記へのこだわりと読者である近現代日本人の文字・表記の正誤感覚のずれから、文字の習得ということに興味が生じた。特に戦後の行草書の衰退、国語政策としての「漢字一字一字体」は、明治の日本人と現代人との文字観に大きな変化を生んだ。国語教育がそれに大きく関わっており、国語教育講座に所属する研究者として、次の研究テーマが浮かび上がってきた。本研究の期間中の2015年3月から1年間、本研究代表者は文化審議会国語部会漢字小委員会委員として「常用漢字表」の字体・字形についての審議に加わった。成果は2016年2月「常用漢字の字体・字形に関する指針(報告)」にまとめられた。この審議における発言は、本研究の成果に基づいたところがあり、またこの審議において戦後日本人の文字観・字体観についての知見が深まった。2017年度には、「漢字を口で言う」「漢字にタイトルをつける」というユニークな教育活動をしている道村静江先生のお話を伺った。漢字字体の把握、漢字の把握という点で極めて有益だった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

- ① 佐藤栄作、字体研究からみた「常用漢字表」の字体・字形に関する指針(報告)、書写書道教育研究、31、2017年、64～67p、査読無
- ② 佐藤栄作、「米山日記」の文字・表記について—江戸、明治手書き資料翻刻の難しさ—、愛媛国文と教育、49、2017年、1～9p、査読無
- ③ 佐藤栄作、「字体」と「手書き字形」—字体研究と「常用漢字の字体・字形に関する指針(報告)」、日本語学、35—12、2016年、46～57p、査読無

- ④ 佐藤栄作、《資料》「常用漢字」等で用いられた「字体」について一本文とコメント、愛媛国文と教育、48、2016年、15～23p、査読無
- ⑤ 佐藤栄作、表記資料としての「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、論集X（アクセント史資料研究会）、2015年、161～176p、査読無
- ⑥ 佐藤栄作、字体を唱える、字体を書く、愛媛国文と教育、46、2014年、11～25p、査読無

[学会発表] (計7件)

- ① Sato Eisaku、The singularity in Japanese notation “Bochan” by Soseki Natsume as an example、3rd Annual Conference in the Humanities: ” From Ancient to Modern”、2017年10月28日、California State University, Sacramento
- ② 佐藤栄作、かたちからみた仮名の自立、表記研究会、2017年1月21日、清泉女子大学
- ③ 佐藤栄作、「米山日記」の文字・表記—明治期の手書き資料翻刻の難しさ—、愛媛大学教育学部国語国文学会、2016年10月8日、愛媛大学
- ④ 佐藤栄作、字体研究からみた「常用漢字表」の字体・字形に関する指針、全国大学書写書道学会、2016年9月24日、岩手大学、招待
- ⑤ 佐藤栄作、画像データベースと漢字字体、国立国語研究所シンポ「字体と漢字情報」、2015年11月22日、国立国語研究所
- ⑥ 佐藤栄作、表記の実態とは—「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」が表していること—、表記研究会、2015年5月23日、関西学院大学
- ⑦ 佐藤栄作、字体を唱える、字体を書く、表記研究会、2014年1月25日、清泉女子大学

[図書] (計2件)

- ① 今野真二、乾善彦、佐藤栄作他、勉誠出版、「秋萩帖」の総合的研究、2018年、ページ未定(23ページ分)
- ② 石塚晴通、山田健三、佐藤栄作他 22名、勉誠出版、漢字字体史研究二字体と漢字情報、2016年、22～34p

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

[その他]
 ホームページ等

6. 研究組織
- (1) 研究代表者
 佐藤 栄作 (Sato Eisaku)
 愛媛大学教育学部、教授
 研究者番号：80211275
 - (2) 研究分担者
 ()
 研究者番号：
 - (3) 連携研究者
 ()
 研究者番号：
 - (4) 研究協力者
 ()